

中小坂鉄鉱山

1840 年代に下仁田の北部にある中小坂鉄鉱山で始まった鉱業は、日本最古の鉄鉱山の一つに数えられています。中小坂では、近代的な鉄製錬が導入される以前の時代にも、良質な磁鉄鉱が十分な量で発見されていました。

1868 年の明治維新後、鉱山は一時的に政府に引き取られ、工業化日本三大鉄工所の一つとして建設されました。その後、鉱山は民営化されました。西洋人顧問のアドバイスで石炭や石灰などの重要な部品を容易に手に入れることができたおかげで、西洋式の高炉は、世紀の変わり目までに中小坂を日本で最も近代的な製鉄所にしました。製鉄所は第一次世界大戦の年にピークに達しました。その後、1961 年まで限られた量の採掘が続けられた後、精製所は閉鎖されました。

現在は廃墟となっています。門からは、かつてマインカートが走っていた跡や高炉の名残を見ることができます。

諏訪神社

諏訪神社は、下仁田町で重要な神社の一つです。神社の正確な年代は不明ですが、敷地内に立っている櫓の木は樹齢 650 年以上であり、神社の年代をよく表しています。

神社はもともと、4 世紀後半に生きたとされる半伝説的な 15 代の応神天皇を神格化した八幡を祀っていた神社です。武田信玄（1521–1573）が戦国時代（1467–1568）にこの地域で戦ったとき、彼は神社を勇気と義務の神である諏訪の神に再び捧げる儀式を執り行いました。武田氏は長年、諏訪の神に親近感を持っており、下仁田神社に諏訪の神を設置することが彼の戦いの遂行を助けると信じていたようです。

現在の神社は、1830 年代後半に現在の長野県諏訪湖周辺から来た大工が建設したとされる比較的小さな建造物です。建物は諏訪地域の建築家が一般的に使用している様式で建てられています。本殿の後ろには虹の形をした梁でつながった内宮があります。切妻、軒、欄間には、植物や神話の生き物が精巧に彫られています。

諏訪神社は、全国に 1 万社以上ある諏訪神社のネットワークの一部です。総本社は諏訪湖畔にある日本最古の神社の一つである諏訪大社。

下仁田の戦い

1603 年から 1867 年まで日本を統治した徳川幕府の末期には、日本の社会的・政治的激動がありました。天狗党は、日本の貿易開放を求める西部の藩国の要求に応えるために、様々な派閥の中で反対意見を持っていました。これらの派閥は、幕府が終わり、天皇に復権する時が来たと考えていました。

1864 年 11 月 16 日に戦われた下仁田の戦いは、幕府から派遣された部隊と、現在の茨城県水戸藩を本拠地とする天狗党との小競り合いでありました。天狗党は、天皇支持

を示すために京都に向かう途中、下仁田を通過していたところ、幕府軍（高崎藩）と戦いとなりました。

戦いは数時間しか続きませんでしたが、これまで下仁田は戦場になったことがなかったことから、（そしてそれ以来二度とない）重要な出来事となりました。町には、地元の倉庫の外壁にある銃弾の穴など、戦いの傷跡が残っています。その近くには、紛争と失われた命を記念して町中に点在するいくつかの石碑の 1 つがあります。詳細は地元の歴史博物館の展示に含まれています。

尊王派の水戸天狗党の反逆を抑えることはできなかったが、しかしながら、天狗党は物資が不足し、最終的には京都へ向かうことを断念し、水戸へ戻った。